ケース 1

あなたは、43 歳の男性、人口 80 万人の A 市にある C 教会に通うクリスチャンである。同じ A 市内にある大学の経済学部を卒業し、東京に本社のある電子機器メーカーの A 市支社に総合職として入職した。就職してからしばらくは忙しい日々が続き、出張も多く日曜日の礼拝に出席できないことも多かった。40 歳で課長になってからは、残業や出張も少なくなって礼拝には毎週出席できるようになった。大学で知り合い、就職後 3 年目に結婚した妻も同じ教会に通っており、小学校 3 年生の長女と 5 歳の長男も教会生活を楽しんでいる。教会の礼拝出席者数は約 120 名、A 市の中ではかなり多い方である。伝統的な教会で、社会的な地位も高い会員が多く、礼拝出席者は多いものの、それ以外の交流は多くない。一部の熱心な会員が、牧師とともに平日の夜に求道者のための集まりや路傍伝道を行っている。

職場ではクリスチャンであることを隠してはいないが前面に出しているわけではなく、直接的に伝道をしたことはない。電子機器の販売が宣教とつながるイメージもなく、仕事はあくまで仕事として考えてきた。相手が顧客であれ同僚であれ、「職場での伝道はタブー」と考えてきた。ただ最近では、大学生や卒業して就職したばかりの若者が新たに教会に来ることも多くなり、このまま「日曜日だけのクリスチャン」を続けていくのでよいのだろうかという悩みもあった。かといって、伝道に関わってきたわけでもない。平日の仕事終わりに出掛ける気力も無かったし、週末は家族とゆっくり過ごすことを心掛けてきたからだ。クリスチャン社会人としての悩みはありつつも、「牧師や宣教師ではなく一般信徒なのだから、仕方が無いのだ」と自分に言い聞かせてきた。

あるとき、キリスト教書店でなんとなく本を見ていたら、「ケープタウン決意表明」という小さな小冊子を見つけた。なんとなく中を見ていたら、「真理と職場」という節があった。その中には、こう書いてあった。

「成人のクリスチャンがクリスチャンでない人と最も多くの人間関係を持っているのは職場であり、そこには伝道と変革のための膨大な機会があるにもかかわらず、この機会をとらえるために信徒を整えようというビジョンを持った教会は少ない。」

そのとき、体に電流が走ったような感覚があった。「職場には伝道と変革のための膨大な機会がある」、これまで考えたことも無かったことだった。冊子には他にも、一般信徒であっても取り組めるような広い意味での「宣教」について多く記載されていた。読むにつれ、クリスチャン社会人としての自分にも何か使命があるように感じた。

その日の夜に早速、職場の同僚のために祈るリストを作成し、翌日から同僚たちに信仰の

素晴らしさを説いていった。平日夜にも教会の活動に積極的に参加するようになり、もともと伝道活動に熱心だった会員とともに、自分たちの教会でも何か事業を始められないかと話し合うようになった。受け入れのよかった一人の同僚もその話し合いに来るようになり、ついには礼拝にも出席するようになるなど、初めて「伝道」に関わっているという自信を持てるようになった。昼も夜も、平日も週末も、すべてが「主に仕えている」という感覚に満たされた毎日に変わった。

そんな中、あなたの仕事の業績は徐々に落ち始めた。教会関連の活動が増えるにつれ、電子機器の販売という業務に使命感を感じられなくなり、明らかに仕事へのモチベーションが低下していたのだった。部長に呼び出され、最近の状況について話をした際、「職場で宗教のことを色々言っているようだが、それはまずいんじゃないか」と言われた。業績低下との関連の可能性も指摘され、反論できなかった。部長には「まあ、個人の信条は自由だから何を信じてもいいけど、職場とはきっちり分けてくれよ。前みたいに、仕事は仕事で頑張ってくれ」と言われた。

あなたは、仕事と教会活動との間で悩み始めた。いまの自分は、職場でマイナスの証しをしていることになるんじゃないか。職場ではきちんと結果を出していた以前のほうが良い証しになっていて、そのことのほうが神に奉仕していたということになるんじゃないか。でも、教会活動に関わっているときの充実感を思うと、「いや、これでいいんだ。仕事よりも、教会だ。伝道こそが自分に与えられた使命なんだ」と思ってしまう。

クリスチャン社会人として、自分は何をすべきなのか。